

土砂災害で、土砂に埋まってしまった人が生存できる期間は三日間が限界と言われる。この期間を過ぎると生存確率は絶望的なものになる。三日を過ぎると、シヨベルカーなどの重機も現場に入り土砂を掘り始めることになる。消防はやむなく救助を止め、現場から撤退しなければならなくなる。だから、三日間の間になんとか救出したい。私たち消防は、この期間休みなしで探し続ける。少しでも生きている可能性があるのだから・・・生存を信じて。

ある土砂災害でのこと。ひとりのおばあさんが土砂に埋もれているという報告があった。私たち消防は現場に直ちに向かい、救出にあたった。しかし、どこにおばあさんがいるのか全くわからない。それでも、ひたすら手を動かし、土砂をよけ、おばあさんを探した。そして必死に土砂をよけているとき、ふと音が聞こえた。気のせいだろうか。いったん全員が手を止め、無音の状況をつくる。「カチツ、カチツ」確かに音が聞こえる。救助隊はすぐさま音のするところを掘った。おばあさんがいた。自分に気づいてもらおうと、必死におばあさんは木をたたいていた。

あとからおばあさんに話を聞くと、土砂の中から助けてほしくて、近くにあった茶碗で木をたたいて音を出していたそうだ。しかし、途中で茶碗は割れてしまい、音を出すものがなくなってしまった。「おじいちゃんの迎えが来たのかもしれない・・・」「もうダメだ」とあきらめそうになった。「でも・・・生きたい。」そう思ったとき、ふと自分が入れ歯をしていることを思い出した。おばあさんはその入れ歯を外し、それで必死に木をたたき続けた。自分に気づいてもらえるまで、あきらめず、必死にたたき続けた。そうして、救助隊に見つけてもらうことができたのだ。

おばあさんは無事に救出された。何時間も生存を祈り続けていた家族、住民の方々、そして消防の仲間から歓声が沸いた。私はこの瞬間を忘れることができない。